1-P-9-1 感染性脊椎炎に対する手術治療の検討

兵庫医科大学 整形外科
○山中一浩（やまなか かずひろ）、森保、徳橋、俊哉、岡田、文明、草野、芳生、吉矢、晋一

【目的】われわれは感染性脊椎炎の治療として病院部の従来・骨移植、抗生物質による化学療法を主に行ってきた。しかし、骨移植の適応を有する症例もあり、後方インストールメンテーション手術を併用した症例につき報告する。【対象および方法】昇温 16 月 5 月から昇温 17 月 4 月までに感染性脊椎炎に対して前方病院部・骨移植、後方インストールメンテーション手術を行い 6 月以上経過観察が可能であった 3 例とした。男性 2 例、女性 1 例。手術時年齢は 25 歳から 72 歳、平均 52.7 歳。内訳は後方血腫型脊椎炎 1 例、脊椎カリエス 2 例（胸椎 1 例・腰椎 1 例）、これら 3 例に対して治療経過を検討した。【結果】脊椎には外側壁・椎弓根スクリュー固定した。胸椎側、腰椎側でブックによる固定をした。術後の所見は 3 例ともそれぞれ異なり、同時に術後、術後所見を記載した。術後所見の変化は、感染型脊椎炎の 1 例で前方血腫型脊椎炎 3 例に後方手術所見で感染を認め、術後所見を 2 週で改善した。脊椎カリエスの 1 例では前方血腫型固定術後に出血が再発し、術後所見として退院を強く術後 2 週経過時点で後方血腫型が改善した。術後の所見は、インストールメンテーションにより再度観察している。感染型脊椎炎の帯血創口の再出血は 3 例中 1 例に認められた。術後所見をもとに術後経過を検討した。感染型脊椎炎の治療は、術後所見を含めた経過観察が有効である。【考察】感染性脊椎炎に対するインストールメンテーション手術は感染症悪化の報告もあり、注意して適応を考えれば有用である。

1-P-9-2 脊髄症の診断における運動誘発電位測定の有用性

慶應義塾大学 整形外科
○児玉 伸輝（こめい なおすけ）、田中、信弘、中西、義、満、貴、光夫

【目的】拡張性末梢神経障害の診断に神経伝導速度の測定が一般化しているのに、脊髄症に対する電気生理学的検査があまり行われていない。今回、脊髄症の診断における運動誘発電位（MEP）測定の有用性について検討した。【方法】過去 10 年間に脊髄症を疑い MEP 測定を行った 72 例を対象とした。MEP は脳幹筋電図に於いて髄側の小脳性および脳幹性電図を導出した。また両側の尺骨神経および脳幹神経電図を導出した。F 波を導出、短時間に導く MEP 測定および短時間計時計測（CMCT）を算出した。拡張性末梢神経障害の合併が疑われる場合には神経伝導速度を同時に行った。検査前の所見は脊髄症脊髄症 343 例、脊髄症性軽度障害 88 例、脊髄圧迫症 56 例、脊髄後遺症脊髄症 33 例、脊髄形成症 42 例、脊髄黄色変形脊髄症 20 例、その他 137 例であった。また 9 例でこれらのうち 2 例以上を合併していた。結果】拡張型でとらえる MEP 潤は脊髄症を延長し、464 例で CMCT が延長していた。また拡張型末梢神経障害を 29 例に認める、このうち 15 例は CMCT の延長をも同時に認めた。手術症例では全例で MEP 潤の延長もしくは MEP 潤異常を認めた。【考察】脇神経細胞陣の障害などの関節疾患を含む脊髄症の形成が困難な症例や末梢神経障害との鑑別もしくは合併の診断を要する症例において、MEP 測定は皮質脊髄症の障害を客観的に評価できる点で有用と考えられた。

1-P-9-3 三次元CTを用いた頸椎後線骨帯形成症の骨化形態についての検討

富山大学 整形外科
○諸崎 亜弥（もさき あや）、川口、善治、関 庄、石原、裕和、木村、友厚

【はじめに】頸椎後線骨帯形成症（OPLL）は頸椎に好発し、脊髄を圧迫して神経障害をきたす疾患である。OPLL は単純 X 線側面像において、分離型、連続型、混合型、その型に分類される。今回、我々は三次元 CT（3D-CT）を用い、OPLL の形態的詳細について検討を行った。【対象および方法】対象は単純 X 線像にて OPLL と診断された 30 例（男性 19 例、女性 11 例、平均年齢 66.3 歳）であった。これらの 3D-CT による画像処理を行い、後方管内での後線骨帯の骨化形態について、単純 X 線像と比較検討した。【結果】3D 画像を構築し、椎体を関節面から除去することにより、OPLL の詳細な形態を後方から把握することが可能となった。単純 X 線側面像では把握できなかった微小な骨化領域を把握することができた。これにより単純 X 線像で混合型と診断された 4 症例中に後線骨帯がみられたものが 2 例、連続型と診断された症例 13 例で骨化が診断されているものが 4 例あった。【考察】現在、OPLL の分類は単純 X 線側面像による分類が広く用いられているが、単純 X 線像には微細な骨化を把握しにくく、また椎間関節が変性が重なったり、変性椎体の存在する場合には骨化形態を把握するのが困難である。今回、3D-CT にて骨化形態を検討した結果、より詳細な形態を観察することができた。今後、後線骨帯の骨化形態を把握する上で 3D-CT は有用であると思われる。